

キンダーカウンセリングの特徴を生かした保育者支援

—文献レビューから—

原口喜充

Psychological Support for Teachers in Kindergarten Counseling

—From a Literature Review—

Hisami Haraguchi

Abstract

The purpose of this paper is to conduct a literature review of kindergarten counseling and to examine psychological support for kindergarten teachers in the clinical psychological practice. Comparing kindergarten counseling with itinerant consultation and school counseling, uniqueness of kindergarten counseling lies in continuity, belongingness and professionalism as clinical psychologist. This uniqueness allows kindergarten counselors to support teachers and children in their psychological transformation.

Keywords: kindergarten counseling, kindergarten teacher, continuity, clinical psychology, review

I はじめに

「心の専門家」である臨床心理士は教育、医療、司法、福祉、産業といった様々な領域で活躍しており、保育・幼児教育分野も臨床心理士が活躍する現場の一つである。保育・幼児教育分野では、巡回相談という形での保育心理臨床がなされてきたが、2003年頃から、関西圏を中心に「キンダーカウンセリング」という新たな形の組織的な保育心理臨床が展開してきている。一方、キンダーカウンセリングに関する研究となると、まだまだ少ない。特に査読付き学会誌に掲載されている論文については、筆者が知る限り、山本ら（2009）、原口（2017）、森岡（2019）、原口（2022）の4報のみであり、キンダーカウンセリングに関する学術的な議論は十分になされていない現状がある。しかし、キンダーカウンセリングの広がりを見ると、活動の特徴や独自性を検討し、効果的な実践に関する議論が望まれる。

そこで、本研究では、キンダーカウンセリングの主たる活動である保育者とのコンサルテ

ーションに着目し、キンダーカウンセリングの特徴や独自性を検討する。その上で、独自性を生かしたキンダーカウンセリングならではの実践について考察する。

Ⅱ キンダーカウンセリングとは

1. キンダーカウンセリングの歴史と展開

キンダーカウンセリングの始まりは、大阪府私立幼稚園連盟（以下、大私幼とする）が「キンダーカウンセラー事業」を立ち上げたことに遡る。本事業は、大阪府内のいくつかの園での試験的な取り組みをもとに、幼稚園における子育て支援の一環として 2003 年から約 40 園で開始された（安家ら，2004）。安家ら（2004）の事業開始 1 年での報告によると、カウンセラーの活動は、保育場面で子どもを観察した内容を生かしつつ、保護者や保育者との相談を行うことであり、これらの活動は現在もキンダーカウンセリングの基本的な枠組みである。大私幼のホームページによると、大私幼に加盟する約 400 園のうち約 100 園でこの事業が実施されており、取り組みが組織的且つ継続的に展開されていると言える。

本事業は大阪府の補助対象事業となっているが、「大阪府私立幼稚園等キンダーカウンセラー事業補助金令和 3 年度補助対象基準（別紙）」によると、補助金の要件として年 12 回以上実施となっており、平均月 1 回程度の定期的な活動である点も特徴的である。大私幼のキンダーカウンセラー事業の開始当初より、キンダーカウンセラー（Kindergarten counselor：以下、KC と略記する）の募集には大阪府臨床心理士会が協力しており、基本的には臨床心理士の有資格者が KC となっている。雇用形態としては、カウンセラーが園と直接契約を結ぶが、園と契約後も大私幼主催の研修が定期的に行われている。

キンダーカウンセリングは、近隣の府県にも広がっており、2009 年から京都府私立幼稚園連盟にて「キンダーカウンセラー派遣事業」が始まり、京都府臨床心理士会がカウンセラー派遣の委託を受けている（菅野，2011；馬見塚，2014）。2018 年度からは兵庫県においても同様の取り組みが始まっている。

3 府県で実施されているキンダーカウンセリングは、府県単位で活動している幼稚園と臨床心理士の団体が協力した上で、組織的な活動として実施されている。3 府県での取り組み以外にも、キンダーカウンセリングと称した活動を行っている場合もあろうが、先行研究も乏しく全国的な展開の実態が十分に把握できないのが現状である。そのため、本稿で「キンダーカウンセリング」や「キンダーカウンセラー（KC）」と記述している場合は、この節で紹介している 3 府県での取り組み、特に筆者自身もキンダーカウンセラーとして実際に活動している大阪府及び京都府の実践を念頭に置いて用いることとする。

2. その他の保育カウンセリング

前節で紹介した 3 府県のキンダーカウンセリング以外にも、同様の保育心理臨床（保育カウンセリング）が各地で展開されている。

大阪府幼稚園連盟がキンダーカウンセラー事業を開始した翌年の2004年度、東京都日野市においても、日野市保育カウンセラー制度が開始された。当初は、日野市教育委員会と公立幼稚園長会が文部科学省の「新しい幼児教育の在り方に関する調査研究」の研究指定を受けて開始されたが、研究指定期間の終了後も、日野市の事業として継続されている（日野市立幼稚園長会，2015）。

同時期に、中央教育審議会初等中等教育分科会（2004）において仮称「保育カウンセラー」について検討され、2005年には文部科学省において保育カウンセラーらの専門家からなる幼児教育サポートチームを置く「幼児教育支援センター事業」が創設される（鶴・水谷，2005）などの取り組みも報告されている。2021年の文部科学省による「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行について（通知）」では、「スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーに関する規定を幼稚園に準用させる」との記載がなされており、今後の幼稚園におけるカウンセリングの全国的な展開が期待される。

この他にも、2002年度より東京都文京区で開始された「子育て支援カウンセラー」（鶴・水谷，2005）、横浜市「旭区養育支援強化事業」における2012年度からの臨床心理士配置の取り組み（横浜市旭区子ども家庭支援課，2018）、福井県が2010年度に「保育カウンセラー配置事業」を創設（福井県健康福祉部 子ども家庭課，2012）、富山県における2010年からのモデル事業を経て実施されている「ハートフル保育カウンセラー派遣事業」（伊東・根塚，2018）など、各地でそれぞれの地域に合わせた形で、臨床心理士を中心とした保育/キンダーカウンセラーによる組織的な心理臨床活動が広がっている。また森田・渡邊（2012）や山下（2011）など、それぞれのカウンセラーが実践している園独自の保育心理臨床の報告も散見される。その他にも、筆者らが研究発表を重ねる中で、先行研究には表れていない園独自の取り組みが実践されていることを複数耳にしている。このように、近畿3府県でのキンダーカウンセリング以外にも、日本各地で保育心理臨床の取り組みが展開されている。

3. キンダーカウンセリングの活動内容

次にキンダーカウンセリングの活動内容についてみていきたい。なお、前項でみたように、キンダーカウンセリング・保育カウンセリングはそれぞれの自治体や団体、園が行っており、活動内容にもそれぞれの独自性があると考えられる。しかし、本項では活動の違いに注目するのではなく、キンダーカウンセリングや保育カウンセリングの概要を示した文献を概観し、各地の保育/キンダーカウンセリングに共通する活動の基本的な枠組みの整理を試みる。

菅野（2004）はKCの活動を①親（保護者）に対する支援（個別相談・情報発信・懇談会）、②園児の直接観察・関わり（アセスメント）、③保育者に対する支援、④外部との連携の4つに大別し紹介している。京都府私立幼稚園連盟キンダーカウンセラー派遣事業について紹介している馬見塚（2014）は、京都KCの活動回数は学期に1回～月2回と幅が広く、園の方針や特徴によって「求められる活動は多様」と前置きした上で、「どの園におい

でも、まずは、気になる子どもの観察と教員へのコンサルテーションは100%行われている」と述べている。滝口（2008b）は、「保育カウンセリングの任務」として、①子どもを理解する、②保護者と子育てに関わる、③保育者と協働する、④地域と連携する⑤保育カウンセリングの広報活動、⑥幼児に関わる者のメンタルヘルスの6点を挙げている。滝口（2008a）は、保育カウンセラーの活動内容として①保護者への個別相談、②懇親会や講演会、③保育者支援の3つを挙げている。坂上（2015）は「日野市保育カウンセラーの五つの役割」として、①保育の観察、②保護者の個別相談、③講演会や懇談会などの保護者を対象とした活動、④保育カンファレンス、⑤地域の子育て支援の5つを挙げている。文部科学省の諮問機関である中央教育審議会初等中等教育分科会（2004）は、保育カウンセラーの主な職務内容として、保護者への専門的援助と幼稚園教員・保育所保育士への専門的支援の2点を挙げている。

以上を整理すると、まず保育/キンダーカウンセラーの支援対象としては、園児・保護者・保育者の3者が挙げられる。園児に対する関わり方については直接観察や関わりを通してのアセスメントを行うのみであり、支援は保護者や保育者を通じた間接支援という形を取っていた。先行研究においては、園内でのプレイセラピー（久米，2014；中津ら，2012）や療育（森田・渡邊，2012）といった取り組みも報告されているものの、キンダーカウンセリングにおける園児への直接支援は、現状広く行われているわけではない。

保護者に対しては、個別面談の他に、懇談会や講演会が行われていた。また、園に在籍している園児の保護者に限らず、地域の保護者の相談にも応じるなど、地域の子育て支援センターのような役割を果たしている場合もある。

保育者とは、観察結果などを元にして園児への関わり方や支援方法について話し合う。形式として、主にカウンセラーと保育者とが個別相談を行うコンサルテーション（以下、Cons.と略記する）の場合と、園に在籍する保育者の多くが参加し保育者集団全体で、特定の園児について検討する保育カンファレンスの場合がある。なお、Cons.やカンファレンスにおける直接的な支援対象者は、取り上げられる園児に直接関わる担任保育者であろうが、KCとの関わりが管理職自身にとっても安心感や自信へとつながるという調査結果もある（嶋野ら，2022）。

以上より、保育/キンダーカウンセラーの主たる活動は、園児の観察、保護者との個別相談、保育者とのCons.やカンファレンスの3点であると言える。これらに加えて、それぞれの事情やニーズに合わせて、外部機関との連携や保護者向けの懇談会や講演会、保護者や保育者のメンタルヘルスの支援など様々な活動が行われている。

Ⅲ キンダーカウンセリングの特徴：類似の活動との比較から

次に、キンダーカウンセリングの特徴を明確にするために、キンダーカウンセリングと異なる活動ではあるものの共通する側面を有する「スクールカウンセリング」と「巡回相談」

との比較を行う。

1. スクールカウンセリングとの比較

日本におけるスクールカウンセリングは、1995年に文部省（当時）によって臨床心理士や精神科医などの専門家を、学校における「心の専門家」として全国154校に配置したことに始まる。現在では、国公立・私立を問わず全国の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に広くスクールカウンセラー（以下、SCと略記する）が配置されており、臨床心理士の主たる職域の一つでもある。ここでは、まず、先行研究を踏まえ、①子どもへの心理療法（直接支援）の有無、②保育者/教師の年齢の違いについて論じる。加えて、小学校以上の「教育」と幼稚園等での「保育」との違いに着目して、③保育者/教師とカウンセラー間の専門性の異同についても考察する。

①子どもへの心理療法（直接支援）の有無について、SCは生徒に対してカウンセリングという形での直接支援を行うが、KCは前節で述べた通り、園内でプレイセラピーや療育などの直接支援を園児に行うことは一般的ではない。中央教育審議会初等中等教育分科会（2004）においても、保護者支援と教員・保育者への援助はKC、SC双方の活動として挙げられているが、SCの職務として児童・生徒にカウンセリングが挙げられているのに対し、KCでは園児に対してのカウンセリング（プレイセラピー）は挙げられていない。複数の理由が考えられるが、一つには幼児に対するカウンセリング（心理療法）では言語面接を行うことが難しいため、プレイセラピーを行うことになるが、そのための玩具や部屋の確保が難しいことが挙げられる。また、幼児に関する相談は必ずしも心理的な問題や傷つきだけでなく、発達に関する内容も多いことや、幼児は周囲の大人から受ける意識的・無意識的な影響も大きいことを考えると、保育者や保護者を通じた間接支援の高い効果が期待できることも理由の一つであろう。

②保育者と小学校以上の教師の年齢の違いについては、保育者の方が平均年齢が若い。菅野（2004）は、幼稚園、特に私立幼稚園の保育者は平均年齢が若いことため保護者との対応に苦慮しており、カウンセラーから見た専門的な理解や、第三者的な立場からの見方や支持を得られると、安定して保護者と関われるようになると指摘している。

③保育者や教師とカウンセラーとの間の専門性の異同については、SCと教師とでは専門性の違いが比較的明確であるが、保育者とKCの場合には専門性の重なりがより大きいと考えられる。まず、保育者や教師はどちらも子どもの育ちを支える家族以外の身近な大人であるが、教師の主たる職務としては国語や算数といった「教科教育」を挙げることができる。特に、中学校や高等学校ではそれぞれの教科担当の教師がいるため、それぞれの教師の専門性がわかりやすい。一方、保育者の場合は、教育・保育内容ごとに専門の保育者がいるわけではなく、それぞれの保育者が受け持つ子どもたちを全体的に保育することが通常である。保育内容について月案や週案といった、大小の計画を立てながら進められているものの、小学校以降での「時間割」と同程度に子どもや保護者に明示されることも多くはないであろう。

もちろん、保育は様々な活動や遊びを通して乳幼児の心身の発達を促していく専門的な活動ではあるが、小学校以降の教師による「教科教育」と比べると、保育者の専門性はみえにくくとも言える。

次に、保育者や教師をカウンセラーの専門生を対比すると、「心の専門家」である SC と「教科教育」を行う教師とでは、違いが明確である。教師ももちろん生徒の心の安定や変化、援助にとって重要な存在であるが、SC との職務の違いが明確であり、連携の際にも役割分担が行いやすい関係性であると言える。一方、KC の場合、後述する巡回相談からの歴史的な影響もあってか、発達障害やいわゆる「気になる子ども」のアセスメントや関わり方など「心理・発達」の専門家としての側面が強調されやすい。そうすると、保育者も KC も行っている活動は別ではあるものの、共に子どもの発達を支援するという意味では、重なる部分も大きい。また、SC が個室で生徒と一対一のカウンセリングを行うのに対し、KC は子どもの観察のために保育室に入っていくという点では、保育者と KC が活動する空間も重なる部分が多い。さらに、保護者支援を考えてみても、保育現場では保護者が送迎に来る場合も多く、生徒が自分で登下校する小学校以降と比べて、保育者が保護者の相談に乗る機会も必然的に多くなるが、KC も SC と比べて保護者支援がより重要な活動である。以上のような活動の重なりから、KC は保育者と同じ目的や意識を持って協働しやすいとも言えるが、一方で専門性の境目が曖昧でもあり、互いの専門性を気付かぬうちに侵害してしまう恐れがある。例えば、保育を観察した KC が保育内容にまで意見をすると、保育者の専門性を侵害しているような印象を与えてしまう恐れがある。

このようにスクールカウンセリングと比べると、キンダーカウンセリングではカウンセラーが保育者の専門性を侵害してしまうような「専門性のねじれ¹⁾」が生じやすい構造になっていることは、協働を行う上で注意すべき点である。

SC との比較から、KC の特徴を整理すると、①子どもへの直接支援を行わないため保護者や保育者への支援がより重要である、②若手保育者の支援がより重要になる、③保育者と KC の専門性は重なる部分も大きいため「専門性のねじれ」に注意して協働する必要がある、という 3 点にまとめることができる。

表 1 SC との比較にみる KC の特徴

	キンダーカウンセリング	スクールカウンセリング
子ども支援	間接支援 (保護者面接, 保育者支援)	直接支援 (カウンセリング)
専門性	重なりが大きい (専門性のねじれ)	教科教育ー心理
保育者/教師の年齢	若手が多い	幅広い

2. 巡回相談との比較

続いて、従来型の保育心理臨床活動であり活動の場や内容面で重なる部分のある「巡回相談」との比較を行う。巡回相談は、「専門機関のスタッフが保育所を訪問して、子どもの保育所での生活を実際に見たうえで、それにそくして専門的な援助活動を行うこと」(浜谷ら, 1990)と定義される。自治体ごとに巡回相談の活動は異なるが、一般的な活動としては、園から挙げられた巡回相談の対象児について、保育場面での観察と発達検査の実施、保育者や保護者からの聞き取り、その後の保育者のカンファレンスでの助言などを1日の中で行う。頻度は年に2~3回が一般的であり(鶴, 2012)、巡回相談の実施は園の要請によって行われる。

巡回相談とキンダーカウンセリングを比べると、まず園との関係性に違いがある。巡回相談では他機関の専門家が園を訪問するが、KCは園との間で直接契約を結ぶという点で立場が異なる。原口ら(2018)はこのような直接契約からなるKCの特徴を「専属性」と表現し、直接契約であるKCは巡回相談と違って園のニーズに合わせて柔軟に活動を展開することができ、園との活動のすり合わせを通して、真に専属カウンセラーとして、園に「根付く」と指摘している。保育者に対しKCの有用性に関するインタビュー調査を行った原口ら(2022)の研究によると、保育者はKCを【外から来る中の専門家】として捉えていた。巡回相談が外部性を有しているのに対し、KCは外部性と内部性の両方の特性を持つ独特の存在であると言える。

活動内容については、巡回相談では一日に数名の対象児のみに対して、主に発達の支援を行うことに焦点化されているが、KCの場合は園児、保育者、保護者に対し、発達面だけでなく心理面についての支援を行うなど、より幅広い活動がなされている。

KCの専属性や活動内容の幅広さに影響を与えている要因として、園を訪れる頻度の違いが挙げられる。巡回相談は年に2~3回程度実施されるのに対し、KCは月1回程度の来園が一般的である(菅野, 2004; 馬見塚, 2014)。そのため、特定の対象児に限定することなく、幅広い支援を行うことができ、園児や保護者、保育者について継続的に支援することも可能である。専属カウンセラーとしてキンダーカウンセリングが園に根付くのも、継続的な関わりを通して、保育者とKCとの間の信頼関係を深めていくことができる(原口, 2017)構造が生かされた結果であると考えられる。

KCと巡回相談員では、専門性についても事情が異なっている。巡回相談に関する43の先行研究を分析した鶴(2012)によると、「巡回相談員の属性は、臨床心理士や臨床発達心理士などの心理専門職や心理学者が多く」、他にも医師や療育機関の職員、保育士、保健師、言語聴覚士など他職種にまたがる。一方、上述のようにキンダーカウンセリングの組織的な取り組みには各府県の臨床心理士会が関与しており、基本的にKCは臨床心理士の有資格者である。

以上の巡回相談との比較により、KCはより園を訪れる頻度が高く、園のニーズに合わせて

て幅広く柔軟な活動を継続的に行うことができることがわかった。また、KCは臨床心理士の有資格者が園の専属カウンセラーとして活動していることも特徴であった。

表2 巡回相談との比較に見るKCの特徴

	キンダーカウンセリング	巡回相談
回数	月1～週1日程度 (専属性→根付く)	年2～3回程度
活動内容	園児・保護者・保育者への 心理・発達の支援全般	対象児数名の 発達支援
属性	主に臨床心理士	心理専門職中心だが多様

IV キンダーカウンセリングの特徴を生かした保育者支援

1. キンダーカウンセリングの保育者支援

これまで見てきた通り、保育・キンダーカウンセリングにおいては、園児の直接観察とそれに基づく保護者とのカウンセリング、保育者とのコンサルテーションやカンファレンスが主たる活動であり、直接の支援対象は保護者と保育者である。保育現場での活動という点を生かすとすれば、保育者との関わりが重要である。そこで、まず保育/キンダーカウンセリングにおける保育者支援について概観する。

まず、保育者支援の内容は、主として心理・発達の支援が必要な園児について共に検討していくことであるが、その形式はカウンセラーと担任保育者が個別相談を行うコンサルテーションと、園に在籍する多くの職員が参加するカンファレンスがある。カンファレンスの場合、園内研修として参加者の知識の習得につながる、園内での共通認識を作るというメリットもあるが、対象の園児について直接支援を行う保育者が他職種の専門家であるカウンセラーの立場からの意見を聞きながら、共に検討していくという意味では、コンサルテーションの一形態であるとも捉えられる。そこで、本稿ではこれ以降、コンサルテーションをキンダーカウンセリングにおける保育者支援の基本的な形式であると位置づける。

次に、コンサルテーションにおける保育者とカウンセラーの関係性に注目すると、互いの専門性を尊重する「対等」な関係性であることが強調されている(例えば、菅野, 2004)が、巡回相談においても同様の指摘がなされている(鶴, 2012)。ただ、キンダーカウンセリングの場合、カウンセラーが園を訪問する頻度がより高く、継続的な関わりが行われるため、その中での保育者との関係性の深まりを実践に生かす視点が有用である(原口, 2017)。

コンサルテーションにおける支援内容としては、園児への間接支援としての園児の見立てや支援に関する話し合いを行う以外に、保育者自身の心理的側面を視野に入れた支援も指摘されている。具体的には、保育者自身のバーンアウトの予防(菅野, 2004)や保護者の

多様化・対応の難しい園児の増加による戸惑いや疲労感の「荷下ろしの場」(滝口, 2008b) と言うような保育者のメンタルヘルスに関する指摘と、「カウンセラーに悩みや愚痴を聴いてもらうことですっきりし、気付きを得る」(菅野, 2004) ことや「保育者の能力の開花」(滝口, 2008b) のように保育者自身の成長や内的変化に関する指摘の2つがある。後者については、保育者の心理面をどの程度扱うのか、詳しくは述べられてはいない。しかし、滝口 (2015) が保育カウンセリングに携わる人にとって「もっとも大切なことは、自分中心の興味関心に囚われない態度と、日常的な常識(自我)を越えた深い知恵。それは、宗教性へと向かう道でもある、と筆者は考えています」と指摘していることを考えると、保育者としてのスキルアップを越えた、その人個人の心理的な変容を含んでいると考えられる。

2. 保育者支援で生かすキンダーカウンセリングの特徴

最後に、これまでの議論を踏まえ、キンダーカウンセリングの特徴を生かした保育者支援について検討していく。まず、SC との比較から見えてきたように、子どもへの支援を考えた場合に、KC は直接的に心理療法を行わないため、コンサルテーションを通じた間接支援が主たる活動になる。また、コンサルテーションは保育者の園児理解や保育の方法を支えるのではなく、保育者の心理面の支援も行われている。そのため、コンサルテーションにおけるキンダーカウンセリングの特徴の生かし方を検討することで、有効的な保育者支援につながると考えられる。その際、「継続性・専属性」を有するキンダーカウンセリングの構造と、臨床心理士としての「専門性」をどのように発揮するのかという2点に着目し、園児への間接支援と保育者への支援という2側面から考察を深めていく。

まず、「継続性」については、キンダーカウンセリングは従来型の巡回相談と比べて頻度が高いため、継続的な関わりを行うことができる。原口 (2022) が「継続的な関わりができるキンダーカウンセリングでは、目の前の問題だけでなく時間軸の中で保育者と園児を理解していくことができる」と指摘しているように、1回限りのその時点でのアセスメントだけでなく、前回からの変化を継続的に追っていくことができる。このように「変化を見ることができ」点が継続性による臨床上の強みである。また、継続的に園を訪問すれば、園児や保育者と関わる機会も必然的に増え、関係性を深めていくことができるという違いもある。この関係性の深まりが「専属性」と関係していることは上述の通りである。

続いて、臨床心理士としての「専門性」であるが、SCと同様に「心の専門家」であること、すなわち心理面を理解し関わる点を挙げるができる。もちろん、幼児の場合は心理状態だけでなく、心理発達の水準や発達特性に関するアセスメントも不可欠であるが、その場合も現在の発達水準や特性を踏まえた、心の理解を行うことができる。

3. 園児への間接支援として

では、実際にどのようにキンダーカウンセリングの特徴を生かしたコンサルテーション

を行うのかについて、まず園児への間接支援としての側面から考察する。

継続性の観点からは、園児の変化を見ることができると言える。園児の変化の具体的内容として、一つにはコンサルテーションの中で話し合った対応を保育者が実際に試してみても効果的であったのか否かという、介入の評価を行うことができる。特に、保育者が実践してみてもうまくいかなかった場合には、再度園児の反応を検討し、対応を修正できるため、効果のある支援を模索していくことができる。また、カウンセラーにとっても、自身が行った支援に対するフィードバックが得られるというメリットもあり、実践の向上にもつながる。

もう一つの変化として園児の成長を挙げることができる。日々園児と関わっている保育者は、コンサルテーションで取り上げられる園児の気になる部分への困り感を日々感じているため、成長やポジティブな側面に気づきにくくなっている場合がある。そこで、一定期間を空けて園児と会い、園児の行動の背景にある発達をアセスメントすることができる KC が、コンサルテーションの中で園児の成長やポジティブな側面へ言及することにより、保育者の視野を広げることができる（原口、2017；2022）。

このように園児の変化を見ていく中で、KC は園児の発達水準や特性についてアセスメントを行うだけでなく、「子どものこころを通訳する」（滝口、2015）といった形で臨床心理士の専門性を発揮している。キンダーカウンセリングにおいて、登園しぶりのある園児の母親との継続的な面接を行った矢本ら（2020）の事例研究では、断続的に起こる登園しぶりについて、その時々影響を及ぼしている発達特性と不安や困り感といった気持ちを KC が「通訳」することにより、保護者・保育者の捉え方と関わり方が変化している。なお、登園しぶりは保育場面ではありふれた状態像の一つであるが、このような日常に現れる困り事に関わっていくことができる点も、継続的な関わりを行うメリットである。

以上のように、園児を心理・発達の両面から理解し、その変化を保育者とともに見ていくことが重要である。

4. 保育者への直接支援として

次に保育者への直接支援としての側面から見ると、こちらも変化をみることができるとは共通している。原口（2017）はキンダーカウンセリング（保育カウンセリング）における保育者支援では「専門家としての保育者を尊重し深まっていく関係性のなかで、保育者の力が最大限に引き出されるよう関わり続けること」が重要であると指摘しているが、まず継続的な関わりがあることで保育者との信頼関係を深めることができる。原口（2017、2022）の事例研究にもみられるように、コンサルテーションを通して信頼関係が深まっていけば、保育者は園児についてカウンセラーと話し合う中で、保育者自身の心の揺れや葛藤を話すことがある。このことは保育者自身のバーンアウトの予防（菅野、2004）や「荷下ろしの場」（滝口、2008b）としての意味合いもあるが、「カウンセラーに悩みや愚痴を聴いてもらうことでスッキリし、気付きを得る」（菅野、2004）、「保育者の能力の開花」（滝口、2008b）

と指摘されているように保育者自身の成長や内的変化につながっていく。原口（2022）は、園児に対する関わり方を検討していく中で、「保育者としての想い」を保育実践に落とし込めるようなコンサルテーションを行うことで、目の前の問題の解決に留まらない、保育観や支援観などの根本的な変化につながり得ることを指摘している。このように、保育者の心理面についてもアセスメントし、関わっていくことは、臨床心理士の専門性を生かした支援であると言える。

なお、これらの保育者への心理的支援は、若手保育者の早期離職を予防し、スキルアップにつながるという意味でも効果的であると考えられる。場合によっては、現場経験の少ない保育者に心理・発達の知識や見方を提供することも効果的に機能するが、「専門性のねじれ」への配慮が必要である。カウンセラーの気づきを伝えていけないわけではないが、臨床心理士としての「聴く」技術も活用しながら、保育者自身の気づきを促すといった力を引き出す関わりも重要であろう。

このように KC は継続性を生かしながら、保育者のこころの動きをも含めて関わっていくことが重要であり、保育者にとって KC が“一緒に考えていく”（原口ら、2022）存在として機能することにより、直接契約といった形式面だけでなく、保育者が心理的も KC の「専属性」を感じることができるようになると考えられる。

V まとめ

本稿では、キンダーカウンセリングの歴史と特徴について概観した上で、キンダーカウンセリングの特徴を生かしたコンサルテーションを通じた保育者支援について考察した。最後に本研究の限界と今後の展望を述べる。

まず、本研究で検討したキンダーカウンセリングの特徴は、スクールカウンセリングと巡回相談との比較から抽出されたが、網羅的なものではなく、他にもキンダーカウンセリングの特徴や独自性があると考えられる。本研究は文献のレビューを通して行われたが、既に指摘した通り、キンダーカウンセリングに関する研究は少なく、先行研究も実践事例に関するものが多いため、今後は調査研究を通じた詳細な検討が望まれる。

また、今回は保育心理臨床の中でもキンダーカウンセリングに絞って論じたが、その他にも同様の活動が各地で展開されてきている。そのため、今後よりこの分野の臨床と研究が発展するためには、それぞれの実践を統合した理論やモデルの構築と、個々の活動の創意工夫の集積が必要である。本研究が今後の研究の発展に寄与すれば幸いである。

<注>

1) この用語は原口・大谷（2018）の執筆時の議論で、共著者の大谷氏が用いた言葉である。

<付記>本研究は大阪大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文の一部を加筆修正したものである。

文献

- 安家周一・邨橋雅広・菅野信夫・辻河優 (2004). 大阪府幼稚園連盟におけるキンダーカウンセリング事業の利用効果. 第 57 回日本保育学会大会発表論文集, 676-677.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会 (2004). 幼稚園職員の資質及び専門性の向上.
- 福井県健康福祉部 子ども家庭課 (2012). 福井県版保育カウンセラーによる子どもの育ちの支援. 子育て支援と心理臨床, 5 号, 104-107.
- 浜谷直人・秦野悦子・松山由紀・村田町子 (1990). 障害児保育における専門機関との連携——川崎市における障害児保育巡回相談のとりくみの視点と特徴. 季刊障害者問題研究, 60 号, 42-52.
- 原口喜充 (2017). 保育カウンセリングにおける保育者支援の方法とプロセスに関する一考察. 心理臨床学研究, 35, 503-513.
- 原口喜充 (2022). キンダーカウンセリングにおいて保育者としての想いに着目する意義. 心理臨床学研究, 40, 289-299.
- 原口喜充・馬見塚珠生・矢本洋子 (2018). キンダーカウンセラーの可能性——“専属性”の観点から見る園への根付き方. 日本心理臨床学会第 37 回大会発表論文集, 410.
- 原口喜充・太田千景・浅井映美子・嶋野珠生・矢本洋子 (2022). 幼稚園側からみるキンダーカウンセラーの有用性①——保育者に対するインタビュー調査から. 日本心理臨床学会第 41 回大会発表論文集, 123.
- 日野市律幼稚園長会 (2015). 子どもたちの未来のために——保育者と保育カウンセラーの二人三脚. 日野市幼稚園長会.
- 伊東真理子・根塚明子 (2018). 富山県「ハートフル保育カウンセラー派遣事業」の展開. 子育て支援と心理臨床, 16 号, 88-89.
- 菅野信夫 (2004). キンダー (保育) カウンセリングの現状と展望. 天理大学カウンセリンググループ紀要, 1, 47-54.
- 菅野信夫 (2011). 報告 京都府私立幼稚園連盟キンダーカウンセラー派遣事業. 子育て支援と心理臨床, 4 号, 59-61.
- 久米禎子 (2014). 保育所・幼稚園でのプレイセラピーの実践——子育て支援の一環として. 鳴門教育大学研究紀要, 29, 24-31.
- 馬見塚珠生 (2014). 京都府臨床心理士会子育て支援部局の活動について. 子育て支援と心理臨床, 8 号, 122-123.
- 文部科学省 (2021) 「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行について(通知)」.
- 森岡理恵子 (2019). 保育臨床における遊戯療法の視点を活かした参与観察. 遊戯療法学研

- 究, **18**, 29-40.
- 森田望・渡邊真伊 (2012). 保育園・常勤臨床心理士の取り組み. 子育て支援と心理臨床, 5号, 68-72.
- 中津郁子・久米禎子・粟飯原良造・井上和臣・葛西真記子・吉井健治・今田雄三・曾川京子・小倉正義・末内佳代 (2012). 幼稚園でのプレイセラピーの実践研究——幼児の「育つ力」と子育て支援としての効果. 鳴門教育大学研究紀要, **27**, 45-53.
- 大阪府 (2022). 大阪府私立幼稚園等キンダーカウンセラー事業補助金令和3年度補助対象基準 (別紙). https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/5499/00020060/03_R3kinder_kijun.pdf (2022年10月5日取得)
- 大阪府私立幼稚園連盟ホームページ. キンダーカウンセラー事業. <http://www.kinder-osaka.or.jp/kc.html> (2022年10月5日取得)
- 坂上頼子 (2015). 保育カウンセリングの実際. 滝口俊子 (編). 子育て支援のための保育カウンセリング. ミネルヴァ書房, pp. 19-40.
- 嶋野珠生・矢本洋子・原口喜充・太田千景・浅井恵映子 (2022). 幼稚園側からみるキンダーカウンセラーの有用性②——幼稚園管理職に対するインタビューから. 日本心理臨床学会第41回大会発表論文集, 124.
- 滝口俊子 (2008a). 保育カウンセリングとは. 滝口俊子・山口義枝 (編). 保育カウンセリング. 放送大学教育振興会, pp. 11-20.
- 滝口俊子 (2008b). 保育カウンセリングの基本. 滝口俊子・東山紘子 (編). 家族心理臨床の実際——保育カウンセリングを中心に. ゆまに書房, pp. 2-19.
- 滝口俊子 (2015). 保育カウンセリングとは. 滝口俊子 (編). 子育て支援のための保育カウンセリング. ミネルヴァ書房, pp. 1-18.
- 鶴宏史 (2012). 保育所・幼稚園における巡回相談に関する研究動向. 帝塚山大学現代生活学部紀要, **8**, 113-126.
- 鶴光代・水谷友吏子 (2005). 保育カウンセラー制度の創設と実際. 臨床心理学, 5号, 711-716.
- 山本麻実子・辻河昌登・辻河優 (2009). 大阪府私立幼稚園におけるキンダーカウンセラー活動に関する調査研究. 心理臨床学研究, **27**, 88-94.
- 山下直樹 (2011). 報告 私立幼稚園における保育カウンセリング. 子育て支援と心理臨床, 4号, 64-68.
- 矢本洋子・原口喜充・嶋野珠生 (2020). 「登園しぶり」を大切に扱う——キンダーカウンセリングにおける継続的な母親面接から. 日本保育学会第73回大会発表論文集, P-259-260.
- 横浜市旭区子ども家庭支援課 (2018). 旭区保育所を活用した養育支援強化事業. 子育て支援と心理臨床, 15号, 60-69.